
飛ぶ、生きること

C96

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ぶ、生きること

【Nコード】

N6526F

【作者名】

C96

【あらすじ】

実験機部隊の二人を中心に描かれる終戦までの空。伝説的なエースである『相棒』のパートナーである主人公を中心として描かれる空、そして二人の戦記。ああそうだ。ピストル好きはカモーン！
晒し

序章（前書き）

この小説は戦闘機メインでお送りしますが、残念ながら作者が無知である故の説明不足、また情報の事実無根などがある場合がもしかしたらあるかもしれません。

もしそうなった場合、なるべく優しくハートマン軍曹のように（矛盾）注意していただけるとありがたいです。

序章

お、新しく引っ越してきた婆さんか。

俺は隣の家のマルクスってんだ。マルクス・フェンダー。よろしくな。

お茶でも飲むか？

外は寒いし、立ち話もなんだし。こう見えても俺は年寄りには優しいんだぜ？

もし必要ならここら辺のスーパーとか、店とか一通り教えるぜ？

……とまあこんな感じだ。おっと一つ言い忘れてた。この街には凄い爺さんが住んでるんだ。この人を紹介しないでこの街を紹介したことにはならねえ、そう俺が思ってるぐらいのスゲエ人だ。

ここの住宅街の隅っこの小さい家に住んでる爺さんはな、昔は空戦のエースだったんだぜ？ なんでもこの国を勝利に導いたエース、だそうだ。今じゃ結構な年寄りだけど、頭ははつきりしてるから今度話してみるといいぜ。あんたなら同年代のお友達になれるかもな。

でさ、その爺さん。それは凄かったらしいぜ。俺の兄貴は軍隊に行ってるんだが、そこであの爺さんの名前を知らない奴はいないそう。何でも、年食った上官ほどあの爺のことを「真のエースとは彼のことだ」って褒めちぎるんだとよ。そこから長々と語りだす奴もいるらしいぜ。いわく、「空を飛ぶ戦闘機がまるで神のように見え

た。我らが国を守っているネーファがまるで戦闘機に乗り移ったようだった」ってな。

俺の兄貴なんかその爺さんの近くに住んでるっただけで半分英雄状態さ！ 本人は割とビビリなのに、ウケるよな。

え？ もっとよく聞かせる？

しょうがないなあ婆さん、現代戦史にも載ってることなんだから、知ってなくちゃあ。

ま、俺も爺さんの話をするのは好きだから大歓迎だけどさ！

溪谷の基地（前書き）

もつちよつと先から始まるぞい

溪谷の基地

キャノピー（コクピットのガラスの部分）の中で首を回して横を見ると、そこには灰色の崖がずっと先まで伸びていた。前を見れば、徐々に崖が広がっていき、出口のように感じる。もっとも、出口と言っても上に機首を上げれば目が痛くなるぐらいの青空が広がっているのだが。

後ろには「あり得ない」場所にある滑走路。崖の裂け目から滑走路が飛び出しているなんて、悪い冗談だ、ファンタジーだつてもう少しマシだ。まず新兵だつたら悲鳴と共に撃墜するだろうな。

といつても例外はあるが。俺の隣で飛んでいる隊長機、コールサインはスペリング。確か雀つて意味だったか。そいつは初飛行でこの基地の滑走路から飛び、演習を終えて着陸したらしい。俺はそれを聞いた時『あり得ない冗談はやめるよ嬢ちゃん。オーケー、あんたがスゲエのはよく分かったぜ』と笑い飛ばしたもんだが、初めてペアで上がったその日に思い知らされたんだから笑えるぜ。その時の相棒の戦果は、6機だつたからな。

今までの戦闘の累積で5機。これが俺らがエースと呼ぶ数だ。そしてこいつは条件を軽々とこなしていた。まったく、エライヤツさ。ちなみに海のと真ん中の大空戦から基地に帰還した後、俺は相棒にへつらうしかなかったさ。圧倒的な腕の差を見せつけられちまったからな。けどどな、そのへつらう俺の姿を見て相棒は『お前だつていい腕をしている。私に追いつけ。お前とはやっていけそうだ』って言ったんだ。

その時点で、あれだな。もうなんつーか人間的な面と実質的な面で俺の完全敗北！

だから俺は相棒の相棒たる腕を身につけると誓ったのさ。エースの相棒に選ばれたんだ、そうしなければ相棒と相棒が落とした敵機にあまりに失礼だ。

「フォルケ、敵との交戦に備える」

「うおつと了解！」

慌てて返事をする、無線の向こうで溜息が聞こえた。当然と言えば当然だろう。基地防衛の為に緊急出撃したのに、全く緊張感のないアホがいるんだから。しかもそいつは2機しかない隊の二番機。一番機からすれば、後ろを任せるべき奴がアホだったら前に集中できない。溜息どころか怒鳴り散らしたい気分だろう。

「何を考えていた？」

「毎度のことだよ、この基地に配属された時の初任務」

「……お前に何度言っても無駄なのは分かるが、思い出を掘り出す癖はいい加減にやめろ」

「アイサー、言ってもらえるだけマシだと思ってありがたく受け取っておくぜ」

通信機からは何も返ってこなかった。というより無線を切られたようだ。これも毎度のことだが多少へこむな。まあ、俺があいつの立場だったら同じことするけどな。

戦闘の前に（前書き）

ちょっとおかしいところあるかも。

ちなみにHUDは高度や敵との距離、そしてロックオンを行う透明な液晶みたいなもん。

IRSTは説明がめんどくさいけど、簡単にいえば機首についた超高性能センサーって感じ。見た目はR2D2（スターウォーズの）っぽい。くるくる回るセンサー。

こいつの凄いところは、パイロットのヘルメットと連動していて、パイロットが見ている方向を探知、さらにロック出来ること。

戦闘の前に

『リトルヴォーゲル隊、高度制限を解除する』

溪谷の出口、広がった部分から出て崖の上まで上昇する。あつという間に崖が真下になり、そこから巡航速で港まで出る。大してでかい港じゃないが、上陸する足掛かりにや上場だろう。

「なあ相棒。ここが攻められるってことは港もぶっ壊されんのか？」

「いや、港には利用価値がある。占領という形になるだろう」

答えが返ってきて安心した。無線の双方向回線を切っているわけじゃないようだ。向こうから俺には通じないが、俺から向こうに通じるようにはなっているらしい。つまり、向こうが会話をしないために無線を切ったが、こちらから向こうへ駄弁った場合、その言葉は相棒に届く。だからもし俺が一方的にベラベラと喋っても聞こえていたわけだ。

そして結局、俺の問いに反応して無線を開けた、と。

相変わらずお人好しだな。言葉は冷たいくせによ。

まあ実際は無線を完全に切ったらいろいろと面倒な事態に陥りやすいからだろうけど。

「そうだったら港にいるかわいこちゃんとも会えなくなるなあ。これは是が非でも守らねば」

「お前、ガールフレンドいたのか？」

「いや回数券が溜まつてるだけっす」

「くそつたれだな」

「今さらかよ？」

「今度こそ見損なつた。地面に降りたら横っ面引っ叩く」

「おおこわ。じゃあ地面に降りたらヘルメット脱げねえな」

『軽口を叩き合っていると失礼だが、そろそろ敵の編隊が見える筈だ。発見次第、電撃戦を行え。君らが敵の足並みを崩し次第、すぐに応援部隊も交戦に入らせる』

「スペリング了解」

「フォルケ了解」。てか俺らって当て馬？」

それから数秒沈黙が支配したが、すぐにそれは破られた。

「前方に敵編隊を確認。距離約35」

相棒がそう言った瞬間、俺のヘルメットのHUDにもそれが表示された。一昔前はガラスのつい立に表示されてたもんですが、今じゃ常に目の前にあるっていうのは技術の進歩を感じずにはいられない。

ツバメの大移動みたいにきれいに並んでやがるな。といっても遠すぎて固まって見えるが。

ちなみに目視で見えてるのではなく、これは熱源を感知し、HUDに表示している。IRSTのセンサーは、時々そこらのリーダーよりの性能がいいんじゃないかと思うぐらい、こいつの性能は化物じみてる。

「速度をマツハ2まで上げる。正面から奇襲をかける」

「正面から奇襲つても妙な響きだよ」

速度を上げ、Gを感じながら操縦桿を握りしめる。徐々に体が強張っていくのが分かる。興奮と耐えがたいスリル、そして恐怖の為だ。こんな感覚が味わえるところを、俺は戦場しか知らない。だから戦場中毒者とかが出るんだろうけどな。かくいう俺も、既になつてるかも知れねえ。平和を楽しめない体っていうものほど悲しいものはないね。

狭い空（前書き）

えつとですね、急造品なんで所々荒いところがあるかもしれません。それとエースの条件ですが、累積撃墜数が5機以上です。お詫びしておきます。本文でも訂正しておきます。それと批評くれると嬉しいにや〜。

狭い空

速度をマツハ2で安定させ、HUDの敵性表示を睨むように目を凝らしながら見続ける。距離を示す数字がどんどん小さくなっていく。緊張感はすでに臨界まで来ている。敵ももう気付いていい頃だ。

「20キロ圏内まで近づいたら中距離空対空ミサイルで、どれかれ構わず敵をロック、攻撃しろ」

「了解」

その範囲に入るほんの数秒前に相棒が指示を出した。もう少し余裕を持って指示だしをしてもらいたいもんだ。

敵の数は爆撃機2、護衛機6？

随分少ない。まあ、もっと先の洋上で迎撃部隊と交戦してるからそのせいだろうな。その迎撃を逃れた悪運の強いヤツだけが、帰るに帰れず目標まで辿り着いちまった、と。これは後ろの連中をを待たなくても相棒が全部落とすちまうかもなあ。

つと、ロック。敵護衛機。

「撃て」

眩くような合図。だが聞きなれた、聞きとりやすい声だ。情熱に踊らされてただ怒鳴るだけの奴よりはよっぽどマシ。むしろ心地いいぐらいだ。

「了解！」

2本の槍が敵まで一直線に伸びていく。その間、敵を俺は見続けなきゃいけない。これはミサイルの性質のせいなのだが、ロックし続けていればこちら側からの情報とリンクし、かなりの機動性で敵を追い続ける。俺なら絶対に使われたくない代物だ。

敵が一気に高度を下に下げ、それを避けた。だがミサイルは尚も追いつける。悲鳴が聞こえてくるような敵の慌ただし機動をほくそ笑みながら、俺は警告音がしたのを確認して速度をそのままに保ち、敵より上に上がった。もちろん、機体を反転させて敵をロックし続

けている。

それは相棒も同じで、俺より少し前を飛んでいる。

「ロックされている」

「あんたもな」

もう軽口を叩く余裕はない。

敵の護衛機はほぼ全機が俺達の事をロックしていた。距離は既に5キロ内。ドッグファイトに持ち込むつもりか、それともそう見せかけて直前にミサイルを撃つのかは分からない。

「爆撃機を優先的に排除。護衛機は後発に任せていい」

「うい」

「敵の後ろまで行けるなら一気に行け。あとはいつも通りだ」

「アレか」

かなりの高Gがかかるからあんましやりたくないんだけどなあ、あれ。しょうがねえ、生き延びる為だし四の五の言ってられんか。それに相棒に置いていかれる二番機つてのも格好がつかねえしな。

「スペリング交戦」

「フォルケ交戦」

1キロ圏内まで来たとき、俺が見ていた前で敵が墜落した。どうやらミサイルを避けようともがいてた護衛機の一機が海上に激突したらしい。馬鹿じゃねえの？

どちらにしる、これでスコアは1プラスだ。

警告音がより一層高くなる。ミサイル接近を告げるものだ。だが悲しいことに、真正面の敵に対してはミサイルは外れることが多い。さっき俺が撃墜した馬鹿野郎は真性マジモンで、引きつけてから回避行動に移ればいいものを、かなり遠い距離からそれに移りやがった。焦りからだと思うが、少しは冷静になれ、と敵ながら言いたくなる。

ミサイルとの距離300m。

機首を一時的に60度まで持ち上げる。割とストレスでミサイルは俺の後ろに飛んでいった。緊張するが、慣れと経験があればどうっ

てことはない。交戦中にやられたら流石に俺でも怖いが。

敵の編隊の直上、こっから俺達リトルヴォーゲルの見せ場だ。マツハ2の状態でのクルビット。(機体の高度を変化させず、機体が進んだまま一回転する芸当)耐G訓練を受けていない人間なら、確実に意識が飛ぶか、下手すりゃ死亡だ。そして反回転、つまり機首が敵さんのケツに向けられた瞬間にロック、二発のミサイルを放つ。

俺達はこれでいくつもの敵を沈めてきた。元アクロバットチームの俺と、この機体のテストパイロットとして訓練してきた相棒。俺達だけの戦闘機動。

爆音、護衛機を2機片づけた。これで俺のスコアが2、相棒が1。そのままクルビットを終え、機首を正面に戻す。その後、大きく右にターンし、後ろから敵に食らいつく。

これからが本当の空戦、相棒の舞台だ。俺はさながら、スポットライトを操る黒子か。だがそれも悪くはない。

空戦で必要なのは何か？ よく新兵に聞かれることだ。

技術？ 当たり前だ。

機体のスペック？ 二の次だ。

スピード？ That's Light!

戦闘は短期決戦、電撃戦。これが鉄則だ。それは人間同士の戦闘でも、空でも。

相棒が爆撃機に舵を取る。まるで跳ねるような機動だ。俺はそれになんとか付いていく。

だが護衛機の横からの攻撃が相棒を邪魔する。その瞬間、相棒は叩き落とされたかと錯覚するほどに急激に下降し、今度は垂直に上昇、この時敵にミサイルを放つ、機体を横転させてフルスロットルし、直角に曲がる。相棒のインメルマン反転はまるで振られるナイフのように鋭い。

相棒が忘れずに放ったミサイルは、敵のジンキングによって外れた。本来なら外れるはずもないが、多分相棒はそこまであの機体を落と

すことに執着がないのだろう。落とそうと思えばいつでも落とせるから。どちらにしる、あの戦闘機は長くは持たないだろう。ジンキングとは、機体の不調や被弾などにより上手く飛べない時に行うものだからだ。ただ上や下に波のように機体を飛ばし、なんとか最低限の動きで避けようとする。そこからの攻勢も撤退もない。

相棒の後ろに付いていくと、普段見えないものが見えてくるようになる。天才の視点と言うべきか、死神の視点と言うべきか。凡人では気付かないほんの一瞬のコンタクト。瞬くよりも短い殺しのポイント。そこを相棒は予測し、そのコンタクトが訪れる数瞬前に反応する。勘がいいなんてもんじゃない、相棒にはまるで未来が見えているんじゃないか、そう思うほど。

あるボクシングのチャンピオンは、自分や相手が撃つパンチの道筋が見えると言っていたが、それと同じようなことなんだろうか。降りたら話を聞いてみるか。

そこで敵の上からミサイルを発射。爆撃機に一発。そして左にロールし、護衛機を追う。

「フォルケ、こいつらは雑魚だ。護衛はいらない、自由にやれ」
「うい、了解」

相棒から離れて上に上がる。と、爆音。どうやら相棒が一機落とすたようだ。

これで俺が2、相棒が2……つとまた落ちたな。相棒が3、と。あとは爆撃機が2、護衛機が1。

「じゃあ俺は本丸を仕留めるか……」

機首を垂直に上げ、エンジンの推力を弱め、エアブレーキ。これでストールの完成だ。

機体は機首を上に向けたまま、ゆるゆると回転しながら落ちていく。敵からは機体の故障や、下手な操縦にしか見えない。そして落ちていく。爆撃機と爆撃機の間。

回転の高Gと独特の浮遊感が体を包む。アクロバット飛行隊、ブレインフェーダー時代によく味わった感触だ。とても幸せな気持ちにな

れる、落ちていく感覚。

敵の爆撃機の前を落ちていく。向こうのパイロット達と目が合った。顔も見えた。

「すまねえな」

一瞬だけの顔見知りには謝りながら、真上を通って行く機影をロック。そして引き金を引く。

直撃、爆風、轟音。

ラダーを回転と逆に当てる回転を殺し、それから操縦桿を引いて機体を平行に戻し推力を上げる。

他の奴らはストールを嫌う。落ちていくのは嫌なもんだし、何より隙を生む。リスクが高すぎるからだ。それに、どっちかという文字通りひよつこのやるミスだしな。だけど俺はこの機動が好きだ。何故なら俺しか好んでやる奴がないから。

さっきのは俺達の戦闘機動、だが今のは俺だけの戦闘機動。

と、上を飛んでいた爆撃機がまた落ちた。やったのは相棒か。周りを飛んでいる敵機は無し。

『敵機全機撃墜。リトルヴォーゲル、並びに基地守備隊1から2番まで全機帰還せよ』

やっぱり、増援が来る前に全部やっちゃったな相棒。まったく、化け物め。

「フォルケ」

進路を基地に取り、やっと静かになった空。俺が身を包む興奮から抜け出せないまま飛んでいると、相棒から通信が入った。多分お説教だろうな、声が固い。

「なんだよ？」

「あの機動はやめると言っただろう」

「うるせえな、俺の勝手だろ？ それとも隊長命令かあ？」

「心配だから言っている。命令ではないが、やるのはやめろ」

「へえへ。せいぜい胸に納めとくよ」

ガラスの日常（前書き）

ラノベっぽいなって分かってるんだ。ただ俺はこんなふざけたのを書いてみたかったんだ。とりあえず種の保存の法則はジェリコの言う通りだと思うわけねえだろべらぼつめい！

ガラスの日常

渓谷の中にある滑走路に上手く機体を着陸させ、岩場の中の巨大な洞窟の中に機体を滑り込ませる。中は呆気に取られるぐらいに広くドーム球場何個分あんのかわかんねえぐらいの空間が縦長にどこまでも続いている。そこかしこに付けられた照明のおかげで暗さを感じることではなく、とてもここが地下だと思えないぐらいだ。

機体を滑走路の横の格納庫に入れ、キャノピイを開いて外気を入れる。それからヘルメットを外し、これ以上ないぐらい最高の空気を吸う。機体から降りて一番最初に味わう空気は、どんな空気よりうまい。山頂で吸う空気がうまいなんて言ってる奴がいるが、山頂より遙かに高いところで仕事をする俺達にとっては景色なんて見慣れたもん、クソの役にもたちゃしねえ。何しろそのいい景色の中から敵さんの機影がびゅんびゅん飛んでくるんだから、ロマンもへったくれない。

「今日は何機落としたんですかー？」

「俺が3、無敵の我が美人隊長が5機だ」

整備兵のアレンに答えを返してから、出る準備をする。ホルスターにP210はきちんが入ってる、オツケーだ。ちなみにいちいちこんなことをチェックするのは、一度だけキャノピイ内にこの銃を置きっぱなしにして半狂乱で探し回ったことがあるからだ。基地中を半泣きで探し回って、ここにあつた時はマジで安心して泣き崩れちまうという醜態をさらしたからだ。それと、その時の相棒の反応は『ガキ』のただ一言だった。

キャノピイから出て紺色の迷彩色の羽に足を下ろす。入隊直後はこんなとこに足を着いても大丈夫なのかと真剣に心配したが、今じゃ飛び跳ねようかと思うぐらいだ。もつとも、それで羽が変になつたらただのバカだし命知らずなのでやらないが。

そこから降りてやっと地面に足をつける。やっぱり地面が人間の

生きるところなんだな、と地に足をつけた瞬間に思う。空も確かにいい。だが長居するような場所じゃない。孤独と同じだ。

だが地面は違う。孤独はない。身が凍るような寒さもない。人が住む場所だ。人が住んでいる場所だ。

それからすぐに相棒も降りてきて、格納庫に機体が入る。相棒のエンジンプレムは、餌を啄ばむ雀のマークだ。なんだか異様にまるっこくて、その手のものに疎い俺でもかわいいと思う。ちなみに俺のは舞い降りる鷹だ。これは俺の持論で、鷹が一番かっこいいからというしょうもない理由に基づく。ちなみに相棒のはなぜ雀なのかと言うと、この機体を開発している際のコードネームが雀だったからだそう。この機体のテストパイロットとして開発当初から乗っている相棒にとっては、雀って言うのが一番しっくりくるんだろう。ま、確認したわけじゃないからわからないが。

キヤノピイが開き、相棒がヘルメットを取る。そして薄い赤色の髪がふわりと一瞬だけ空中に浮き、相棒の耳やうなじにかかる。明け方の空にも似た青色の瞳は、一瞬だけ俺を見て機体に向いた。赤毛でセミロングの超美人、これが我が軍のエースとは世も末だ。特に、女を戦場に出すようになって、しかもそれを広告塔に利用するとは、ま、これで志願兵が増えるのは事実なんだが、どうも割り切れないうって言うか歯切れが悪いな。女は守ってやるもんだろ。戦うなどは言わんが。

「よう相棒、今日も大好調だったな。ガラナチヨコでも食って飛んだか？」

片手を上げていつも通りに軽口を叩くが、返事は返ってこない。いつもなら『使いもしないゴムを部屋に貯めこんでるお前と一緒にするな』とか返ってくるんだが。

翼から地面へと滑るように降りると、やや小走りで俺に向かって走ってくる。背は小さめな方だから、俺の胸ぐらいまでしか身長はない。だから走ってこられると、なんだかすごくかわいい。普段は冷たい声しか聞いてないので余計にそう感じる。これで分厚いパイロ

ツト服じゃなけりやもつとかわいいんだけどな。

「お、感動の再会！？ さあ俺の胸に飛び込んで……」

とそこまで言つて、体を反転し足を思い切り踏み込んで格納庫の扉から逃げ出した。相棒が瞬きすらせず俺を見つめて向かって来る時は愛の告白でもなく、しよ？ というメッセージでもなく、単純に敵をロックした時の瞳だ。コクピット内で、戦闘中に見た訳じゃないがそう直感で感じる。

「戦闘前に言つただろ？ 横っ面ひっ叩くつて」

「わりい忘れてた！」

飛んでくる冷たい、だが音量の大きい声に半分笑いながら返す。その数瞬後に相棒が銀色で分厚くてボルトなんかを締めそうな棒を持つて走り出てきた。てかスパナ。

「ちよっふざけんな凶器禁止つて言つてんだろが！」

完全無視して追つてくる相棒を時々ちらりと振り返つて確認しながら、確実にその距離が縮まっていることを確認して、心の中でド畜生と叫ぶ（声を出すと走りにくい）。

これは相棒の長所だが、足が速い。この基地で一番足が速い。ハイスクール時代は陸上部で、短距離で優勝したこともあったそうだ。それだけの足がありながら、どうして軍隊に来たのか。相棒の過去を知つてる人間なら皆疑問に思うが、誰も答えてもらえた人間はいない。

それよりもそろそろやばい。あと数歩で捕まるぐらいの所に來てる。だがあと少し、あと少しで基地施設内に逃げられる。そうすれば相棒だつて無暗には追つて來れないだろう。

「ぐがつ！」

その数メートル手前で、俺の背中に鈍痛と衝撃が走り、反動で転んだ。後ろを振り返ると、転がったスパナと飛んでくる相棒の靴底。スパナを投げるのはあまりにも卑怯だと思ふんだが。

相棒は立ち上がるうとする俺の頭を思い切り平手で叩くと、回数券無駄にならなくて良かったなドスケベ、と言い放つて施設の中に入

つていった。基地司令に作戦報告をしにいくんだろう。俺も追わなきゃいけないが、あいにくスパナの野郎のせいであと少し動けそうにない。もしも遅刻して文句言われたら思いっきりありのまま言うてやるからな。

それから数十秒もがいた後に、何とか立ち上がってふらふらになりながらも司令室まで急ぐ。別に報告は相棒一人だけでもいいんだが、ここの司令の方針で俺達はセットで報告に来るようになってる。あまり開けたくない、金色のプレートがかかった扉を開く。

中には簡素なスチール製の本棚が二つと、対照的に高級そうな士官用ともいえる嫌味なデスク、それだけだ。広さは俺の汚い部屋が三つ分くらい。個人の仕事部屋としては破格の大きさだろう。本棚には報告書がバインダーに入れられて奇妙なくらいぴしりと収まっている。こいつの几帳面な性格が良く出てるな。暇さえあればこういうのを並べ直してニヤニヤ笑ってるんだろう。うわ、想像したらあまりにもハマりすぎてて笑えねえ。

「ジェリコ少尉、時間には気をつけたまえ。君がルーズなおかげで、いつか兄弟が死にうるかもしれんのだからな」

ああそうだ、忘れてた。この部屋のもう一つの付属品のコツプアー少佐殿。椅子に座って机で腕を組み、こちらを若干おどおどと見てくる。丸メガネを掛けたただの青年、というかいじめられっ子にしか見えないこいつが、この基地の最高司令官だ。実際はただのキャリア組で、この基地を指揮する能力なんか毛頭ないと俺は踏んでる。実戦で得た勲章も全く無いしな。付け加えるとすれば、ちよつと有名な指揮官の息子って事だ。

「失礼しました少佐。ちよつと機体をチェックしていたので」

「そうか。だがサコ大尉は君よりも早かったが？」

「それは彼女の足が速いからです、少佐。それに、彼女はスパナと走ることが好きでして」

してやったり、と満足して相棒を横目で見るが、いつも通りの凜々しいお顔。あーツマンネ。

「……まあいい。それでは戦果報告を」
ちよつとぐらいひねって返してくれてもいいと思うんだけどな。まあそんな脳味噌もないんだろう、こいつには。それに怒鳴る度胸もない、と。やっぱ駄目だな、こいつは。
「はっ」

今まで黙って突っ立ってた相棒が、見事な敬礼をして戦果報告を始める。相変わらず様になる奴だ。もしも俺が学生時代にこいつが敬礼してるポスターでも貼ってあったら、もしかしたら真面目な気分で入隊してたかもしんねえな。

「なあ相棒」

「なんだ？」

司令室を出てすぐ、相棒を呼び止める。

「飯でも一緒にどうだ？」

出撃のせいで時刻は1時を少し回った時間だ。普段の昼飯の時間よりは遅いが、食堂は夜中の12時までは無休でやっているし、問題はないはずだ。というか、たまには女と食事してみたいというのもある。基地の中にいるいつも周りにいるのが男ばかりで、汗臭い。港の娼婦も、香水がきつくて実際はあまり好きじゃないしな。「……いいぞ。ただし、ベラベラと喋ることは禁止だ。私が話を振った場合のみ、会話をしてもいい」

「あーはいはい、それでいいって。相変わらずつれないねえ」

食堂に着いて、おばちゃんに炒飯と餃子を頼む。相棒はチキンカツカレー。相棒は少し味の好みが子供っぽく、ファミレスなんかに出てくるハンバーグやオムライス、あとはコロッケなんかが好きだ。別に悪いとは言わないが、普段のイメージと違ってそういうのを食べている姿を眺めるのはちよつと複雑な気分だ。

窓際の席に座り、向かい合って食べ始める。分かり切っていたことだが、特に会話はしない。普段ならアレンとか整備兵の奴ら、あとはエリオットとかと飯を食うんだがな。如何せんあいつらは既に昼飯

食っちまってるいな。会話がないのが苦手ってわけじゃないが、やっぱ多少緊張する。

しばらく無言で食べていると、おもむろに相棒が言葉を発した。もちろん、カレーを食べながら。

「珍しく今日は喋らないんだな」

「そりゃあな。あんだだけ釘刺されりゃー喋らねえよ。それに仮にも上官だしな」

最後の正直嘘だ。こいつを上官として意識したことは殆どない。だがそれでも俺が喋らなかつたのは、また黙って席を立たれてどこかに行かれるのはごめんだつたからだ。

相棒とペアを組んで間もない頃、相棒が釘を刺していたにもかかわらず俺は喋った。これから一緒に戦うんだから仲良くしようやとか、それにしても可愛いねえ流石ポスターに使うだけあるよ、などと。

少なくとも前者は真面目だったんだが、話の内容が後者8割だったら、相棒みたいなタイプは真面目に話す気はなくなるだろう。

そういう風にしていたら、相棒は立ち上がり俺にこう言った。

『どうせ死ぬ奴の名前を覚えて何になる？』

そんで相棒は食堂から出ていった。残された俺がどうしたかというのと、大歓声と共に群がってきた食堂中の兵士達に笑いながら労われた。そいつらの話を聞くと、俺みたいにあしらわれた奴はかなりの数いるらしかった。

それでそんな時嫌な話も聞いた。サコ大尉とペアを組んだ奴は必ず死ぬとか、呪われてるとかな。

まあ、現に俺が生きてるんだからそれは嘘っぱちだつたってことなんだろうけどな。

だがその時の俺はその言葉を真面目に信じてたんだ。

飯を食い終わって暇になったので、ばれないように相棒の飯を食う姿を眺める。こうしていると、英気を養うということの意味が良く分かる。男は南国の休息より、美人の顔を見てる方がよっぽどくつろげるらしい。

小さい口で食べているからか、それともスピードが足りないからか、または両方かどうかは分からないが、相棒の皿の上のカレーはまだ半分程度だった。正直十分英気を養ったし、喋れないんならこのままどっか行っちゃまうか。エリオット達に暇があれば相棒の機動を教えしてくれ、とも言われているしな。

俺がトレイに手を添えた瞬間、相棒が口を開いた。

「結局お前は死ななかつたな」

こちらを見ずに、チキンカツをスプーンで器用にちぎりながら、そう呟く。

俺はどう答えたらいいか分からず、次の言葉を待った。

「今まで6人の奴とペアを組んだが、なんでお前なんか私の相棒として定着してしまつたんだ？」

「言つに事欠いてそれかよ……」

わざとらしくため息を吐く。そう思っているのは知っていたが、真正面から、しかも心底残念そうに突きつけられるとへこむ。どうせなら軽く言つて欲しかったんだがな。

「俺で悪いか？」

「腕はいい。キレもある。だがお前みたいな奴がそれを持っているのが気に食わない」

「あのなあ」

スプーンがご飯とルー、そして小さく千切られたチキンカツをすくつて口に運ぶ。口の端っこにカレールー付いてるぞ、と教えてやるうかと思つたが、これは最後の反撃の手段に取っておくことにした。「お前みたいに不真面目の典型みたいな奴が、どうして生き残るんだろううな」

「そりゃあれだ。多分性欲が強い人間の方が生き残れるように神様の御宣託が」

「ないな」

「いや人間は死にそうになるほど種の保存の法則が働いてだな。だからその手の欲が強い奴はいつも種の保存の法則が」

「猿か？」

「おま、俺は確かに猿並みにあると言われたことがあるがあいつらほど早くな」

「黙れ」

「じゃあなんて答えりゃいいんだよ……」

椅子にふんぞり返って脱力する。俺の脳味噌じゃこれが限界だ。

「もう少しまともに返せないのか？」

「この手の質問に真面目に返せる奴は自画自賛しすぎのナルシストだと思っけどな。自分の腕がいい理由とかを吹聴する奴は。お前だつて俺が何でそんな上手いんだ？ つて尋ねると、乗ってる日数が長いだけだ、つて言うじゃねえか」

「少なくとも私は真実だけを言ってるつもりだが？」

「俺も真実だけを言ってるつもりだ」

「それが真実なら最悪の世の中になってるな」

「ああ、今自分で同じこと考えて絶望した。女が全部淫乱だなんて……俺には耐えきれん！」

「嘘つけ変態め」

「馬鹿言え。女が全員素っ裸で迫ってきてみる。チラリズムも着衣の可愛さもねえ」

「はあ……なんでお前みたいなのが本当に生き残るんだろうな」

深く長く溜息をつくとき、皿を持って相棒が立ち上がる。別に愛想を尽かされたわけじゃなく、単純に食べ終わっただけらしい。俺も後を追う、おばちゃんにトレイを渡す。

「相棒、これから暇か？」

出口に向かう後ろ姿に声をかける。

「いや、機体を見てくる」

「そうか、じゃあいいか」

「もういいか？」

片目だけが覗くようなアングルで振り返った相棒に、呼びとめてスマンな、と言っ返す。

少し話したいことがあったんだが、そういうことなら仕方ない。機
体と向き合うのは重要だからな。

「ふわぁ〜あ。しゃあねえ、銃でもいじるか」
あくびをしながら独りごち、自室へと向かった。

ガラスの日常（後書き）

案外ラストまで見えてきたよ。書き切れるかもしれん。

それと感想くれ。いやくだせい。

面白いです、の一言でもいい。補給のない最前線で戦い続けるのは悲しすぎる。

あと読んでくれてる人達へ。

ありがとうよ、戦友！（紅の豚）

被撃墜数カウント1（前書き）

こっから展開変わるよー。

正月早々更新だよー。

質問などがあれば、感想フォームで遠慮なく聞いて下さい。評価ゼ口でもオツケーなのでね。 評価ゼ

被撃墜数カウント1

レッドアラート！

機体を捻り上げ、急降下しながら左へとロールし、エンジンを全開にして速度をあげる。

なんとかミサイルは振り切ったが、敵はまだ多い。ちくしょう、敵も上の下って奴ばかりだ。

またレッドアラート！ 休む暇もなくまた逃げる。仲間を気遣う余裕もなく、叩くよりも無様に逃げることに集中する。敵はピッタリと俺の後ろに付いてきていて、しつこく狙ってくるのが一機。

右にロールし、機体を背面まで持つてくる。そしてそのまま機体を斜めにロールさせる。地上から見れば、斜め宙返りだろうな。

敵は大きく下にバレルロールしながら俺を追ってくる。だがそれが狙い目だ。

思いっきりブレーキをかけ、速度を落とす。

この機体が異常に腰の柔らかい戦闘機でよかったな。

こころ曲がるんだよ。

機首を上に向けて、そのまま180°回転する。

これで敵の機影が目の前に見えるようになる。

ほんの一瞬だけだな。

機関銃を掃射しながら、右下に滑り降りる。ミサイルは俺の左を通り抜けていった。

それから地面を触れるか触れないかの所で、左にロールする。それから上を飛んでる敵さんをロツク。下から一発撃ち、様子を見る。

このミサイルを避けるのにそれなりに必死になってるようだ。俺も絶対にロツクを外さないから、かなりしつこくミサイルは追っただろう。

それから機体の速度を上げてから一気に上昇し、真下から奇襲をかける。

「逃げんのが下手くそなんだよ臆病者がッ！」
そのままギリギリまで接近し、下から機銃の雨をお見舞いしてやる。仕上げに追い続けたミサイルが着弾、爆散した。あれじゃ中に乗ってた奴は即死だろうな。

下で戦ってる奴らの少し上で機体を水平にし、ほんの少しだけ、気を休める。機体は横滑りさせたまま。これでもしも突然襲われてもほんの少しだが回避率は上がる。
はずだった。

アラートが聞こえて操縦桿を傾けようとした時には、時既に遅し。
ミサイルは俺の機体に直撃していた。

最後に声が聞こえるかと思ったが、走馬灯もなくただ甲高い音が聞こえただけだった。

俺がまだ、サンタさんを信じていた頃、俺には好きな女の子がいた。その時はまだ今みたいに擦れていなくて、ナンパどころか女の子と顔を合わすだけで真っ赤になっちゃう純情ハートだった。嘘じゃねえよ。

その子と俺がそれなりにいい雰囲気になってきた時、俺は親の都合で遠い場所に引越した。その時の俺は、距離が離れるってことをまだよく分かかっていなくて、ちょっと長めの旅行みたいに感じていたんだ。もつともそれが間違いだってことは、少し新居から自転車で走ってみれば分かったんだけどな。どこまで行っても同じ景色。まるで絵本の中みたいだった。新しいお家には冷たい雪が降り積もっていて、周りの家も全部真っ白だった。最初こそ雪ではしゃいだもんだが、2年もすりゃ雪で遊ぶことなんかなくなる。

その子とは一応連絡を取り合っていた。一か月に一回届く手紙っていう、薄くて千切れてもおかしくないものだったけどな。だけど信じられないことに、そんな関係でも俺達はお互いの事を思い続けて

いた。思えば長く続いたもんだった。俺がジュニアハイスクールの3年の時まで続いたんだからな。

別れとなる日は、俺達が自分達で決めたようなもんだった。

最初で最後、俺達は電車を乗り継ぎ、約束した場所まで会いに行った。

場所は有名な水族館があつた港町。俺からは電車で9時間、彼女からは電車で3時間の場所だ。飛行機を使えば良かったんだが、そんな金は学生である俺達にあるわけがなかった。

思えば、この時が一番幸せな時間だった。ただ期待に胸を膨らませて、電車に乗り続ける。深夜に発車する電車に乗ったくせに、俺は半分以上の時間、窓の外の真つ暗闇を見つめ続けて彼女の面影を探し続けていた。手紙に同封された写真を思い浮かべて、その姿を闇に描きながら。

いつの間にか落ちた眠りから目覚めた時、辺りは異常な喧騒に包まれていた。

漏れ聞こえる話を聞く限りでは、線路が爆撃の直撃を受けてこれ以上進めないとか何とか。

そして、目的の町が爆撃を受けたらしいことも。

電車が止まったここからその町までは、そう遠くないはずだった。あと6時間ぐらい歩けばなんとかなる。

他の乗客が止めるのにも関わらずに、俺は歩いた。泣きながら、戦争を恨みながら、金がない自分を恨みながら。走って休んで、走って休んで。諦めそうになっても、彼女の笑顔を思い浮かべて歩き続けた。

思えばこの時が俺にとって初めての戦争との出会いだった。戦争つてのは、いつも突然自分の身に降りかかってきて、それは自分が軍属じゃない限り防ぎようがないんだ。そう分かったのもこの時だ。着いた街はひどい有様だった。火はもう消えかけていたけど、火傷で苦しむ人の列はどこまでも続いていくかのようにだった。

約束の場所は、奇跡的にも爆撃を受けていなかった。多分、敵のこ

配慮って所だろう。

けどそこには大勢の怪我人が集まる場所となっていた。水族館の職員らしき人間も、血が付いた包帯を両手いっぱい抱えて走り回っていた。魚たちの水槽にも、血のペイントは時々飛んでいた。その水槽を眺めたまま死んでいる子供もいた。その水槽の中で魚は元気に泳ぎ回っていた。不思議だった。

凄惨な状況の中、彼女の姿を探した。約束の時間はとうの昔に過ぎていたけど、彼女なら待つてくれているかも、とそう思ったからだ。もつとも、そんなの俺の自惚れで、彼女の姿は街中どこを探しても見つかることはなかった。死体の山も半泣きになりながら見たけど、その山から生える女の子の腕を引っ張って、胴体がくっついて来なかったのを節目に諦めた。

そしてそれから彼女からの手紙は届くことはなく、俺も手紙を送るのをやめた。

呆気ない幕切れだった。笑っちまうぐらい、呆気なかった。

既に自分の町になった雪の町に戻って、俺は泣くことすらせずにただ虚ろに毎日を過ごした。その虚ろさから抜け出さたくて、色んなもんにも手を染めた。ハイスクールは卒業するのがいっぱいいいの成績で、夢なんてもんも希望なんてもんも全く見えなくなっていた。ただ遊び歩いて、彼女の影を忘れるために女に溺れた。愛もクソもない、身体だけの関係に溺れた。相手も似たようなもんで、事が済みや示し合わせたようにさっさと互いから離れた。

俺が家に帰らなり、女のぼろアパートでヒモとして暮らしている時に、突然俺の爺さんが訪ねてきた。

堅実な公務員、それが俺の爺さんだ。俺にとっては、昔も今も尊敬すべき人だった。だから爺さんが訪ねてきた時のシヨックは、今思い出しても胸に刺さる。尊敬している人に軽蔑されることを、俺は今更ながら恐れたんだ。

爺さんは完全に腑抜けになった俺に向かって、いきなり銃を抜いた。その瞬間、俺はそれを綺麗だと思った。その銃がとても綺麗だ、と。

自分に向けられる銃口を眺めて綺麗だなんて思っただから、俺は相
当な変態だろうな。

「すまん」

顔中に苦しさを湛え、しわを一層深くしながら爺さんは短く呟いた。
そしてその言葉の意味を悟る間もなく、爺さんはその次の瞬間俺の
脚を撃ち抜いた。

その時俺がなんて思ったか、分かるか？

なんで殺してくれないんだ、って思ったのさ。

激痛に喘ぐ俺を尻目に救急車を呼び、俺と爺さんは一緒に病院に行
った。

その病院での出来事を、俺は一生忘れないだろう。爺さんは俺に説
教をかまし、それから軍隊に入れと言った。軍隊に入って自分を叩
き直して来いと。軍隊に学歴は関係ないから、それにこの御時世ど
んなガキでも入れるだろう、だから心配はいらないと。そして死に
たがっていた俺はそれを快くやけくそに承知した。正直、俺の人生
をぶっ壊してくれた敵国の馬鹿野郎に銃を撃って死ねるんなら、そ
れもいいと思っただしな。バカだから、死に場所が戦場ってのもカッ
コいいじゃねえか、とかアホなことも考えた。

その時、爺さんから俺を撃った銃を渡された。これを持って行け、
と。

ガンブルーの芸術品のそれは、SIG-P210といった。昔は一
丁1500ドルもした代物で、今ではかなりのプレミアが付いてい
るらしい。ちなみにそんなに高価なのは前期型だ。そして俺が持つ
ているのも前期型。じいちゃんガンマニアだったのかね。そんな
話は聞いたことないが、もしそうだとしたら俺にもその血は流れて
いるんだろうな。

俺はこの銃に誇れるような人間になったのか？

なあ？ どうだと思っ？

お前なら答えてくれる気がするんだ。

相
棒。

被撃墜数カウント1（後書き）

P - 210の話：

P - 210はスイスが作った傑作の自動拳銃。主なパーツは殆どが鉄の削り出し加工で行われ、古き良き時代の体現とも言える芸術品。本編でも語られているように、その色はガンブルーであり、吸い込まれるほどに美しい。

当時の拳銃としては絶対的で他の追随を許さないほどの命中精度があり、それに比例して値段も高い。値段は本編でも言ってるが、当時で1500ドル。たかだか拳銃一丁にそんなにかけてどうすんだよって言うぐらいバカ高い。

他にも書きたいことあるけどここらへんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6526f/>

飛ぶ、生きること

2010年10月9日11時53分発行